



Title	<書評>上羽陽子・金谷美和編『躍動するインド世界の布』
Author(s)	岡田, 弥生
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89285
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【書 評】

上羽陽子・金谷美和編『躍動するインド世界の布』

昭和堂 2021 全 130 頁

岡田 弥生 大阪大学大学院在学

身体を保護し、住空間を整える布地は、私たちの生活のあらゆる場面で欠かすことができない。誰もの生活に必要なことから、布地は人々の暮らしや考えを豊かに反映するものである。

本書は、インド、バングラデシュ、ブータン、ネパールなど南アジアの国や地域の専門家による論考とコラムで構成され、布地という媒体を通して、異なる民族や宗教、カーストが織りなす複雑な社会を紐解いてゆく。各部は、「場をくぎる」、「人をつなぐ」、「神と人との媒介になる」、「政治をうごかす」、「グローバル経済をうみだす」といった身につけるだけではないユニークな布地の働きを紹介する。本書が扱う多様な布地の姿からは、南アジアの人々の営みや考えを垣間見ることができる。

第1部「場をくぎり、人をつなぐ布」では、時間や空間に秩序をもたらす布の働きに焦点が当てられる。福内千絵「吉を招きいれる——戸口飾りトールン」は、インド全域でみられるトールンという戸口飾りについて論じる。縁起物の玄関の飾りとしてだけでなく、人々が神とまみえる空間を創出し、聖と俗とをくぎるトールンの役割に注目する。金谷美和「絞り染めの婚礼衣装——花嫁に贈る布」では、グジャラート州のカトリーというコミュニティで見られる婚礼用の被り布を例に、布地がいかに異なる集団の家族同士をつなぐかを明らかにする。三尾稔「関係を更新する——ラージャスターンのターバン」では、儀礼や祭礼の際に頭に巻かれるターバンが、人同士の関係、人と神との関係を結び直す役割を担っていると紹介する。岩谷彩子「輪廻転生する布——古着のフローがむすぶ世界」は、古着の循環が異なる階層や地

域の人々をつなげると論じる。五十嵐理奈「空間を一変させる『布建築』——バングラデシュのトロン」では、布地の形態を活かした即席の建築物が取り上げられる。

第2部「神にとどく布」は、祈りや祭礼など、宗教行為に使用される布地の事例を挙げ、人々が神とつながろうとするとき、布地にいかなる働きが期待されるのかを考察する。上羽陽子「聖と俗——染色布で女神寺院をつくる」では、グジャラート州で一部の人々が使用する女神儀礼のための染色布が紹介される。女神や女神の持ち物が緻密に描かれた布地は、聖と俗とを隔てる仕切りとなる。豊山亜希「神と出会うために——礼拝儀礼布ピチュワーイー」は、儀礼の背景布から、アイコンへ、現在では商品化された文化資源へ、機能を変化させてきたピチュワーイーという布地の姿を捉える。福内千絵「神に捧げるキラキラ布——石版画の絵姿をめぐる」は、石版画で描かれた神々に施される布装飾が、神が「ここにいる」ことを人々に実感させるのだと論じる。鈴木英明「墓廟にかぶせる布——ダルガー・チャーダル」は、スーフィー聖者の墓にかけられる布地をとりあげ、寄進にこめられた意味を分析する。杉本星子「女神の霊力——奉納されるシルク・サリー」は、女神が持つ強力な力をもとめて人々が寺院に捧げるサリーについて、その種類や方法を紹介し、コロナ禍におけるサリー奉納の現状にも触れる。宮本万里「願いをたなびかせる——ブータンの祈りの旗」は、チベット仏教圏であるブータンで厄除けや供物として掲げられる旗と、人々の信仰について論じる。第3部「政治をうごかす布」では、特定の

思想を表現し伝達する布地をとりあげながら、コミュニケーションを図る媒体として利用される布地を検討する。豊山亜希「民族独立運動をつなげる ― 手紡ぎ手織り布カーディー」は、マハートマ・ガーデンディーが提唱したカーディーという布地を紹介する。イギリスからの独立への手段として誕生したカーディーは、現代に受け継がれながら新たな役割を獲得しつつあるのだという。杉本星子「モーディー首相、サリーになる」は、政治的立場を表明するサリーに焦点をあてる。豊山亜希「国民形成の象徴 ― インド独立にみる国旗」は、インド国旗の変遷から、インド国家の統合と形成を垣間見る。五十嵐理奈「政治とスローガン ― バングラデシュの横断幕」は、布地がなぜ政治的運動に選り取られたのか、布地のもつ素材の特性や視覚効果からその答えを導き出そうとする。高道由子「ナショナリズムの表象 ― ネパールの織物ダカ」では、いかにネパールがダカという織物文化をとおして、民族意識を形成してきたのか、またその起源をめぐる対立について報告がなされる。金谷美和「ナラティブ・テキスタイル ― 刺繍で表す被災経験の語り」は、2001年にインドのグジャラート州で起こった震災を題材にしたアーダム・サンガール氏の刺繍作品《26-1-2001》をとりあげる。彼の個人的経験に基づく表現は、震災からの復興という一般的な物語に回収されない普遍的なメッセージを発信している。

第4部「布がうみだすグローバル経済」では、海を超えて受容された布地が新たな価値を付与された事例や、伝統芸能に使用される衣服がグローバル化に直面するなかで変容を遂げてゆく様相が紹介される。金谷美和「世界を魅了したファッション・アイテム ― バンダナの誕生」は、バンダナ誕生の起源に辿り、モノが移動することで醸成される新たな文化を捉える。鈴木英明「アフリカを彩るインド産プリント布カンガ」では、アフリカを代表するテキスタイル、カンガが紹介される。流通や制作に、インドを始めとする多くの国々が関わってきたカンガの事例からは、土地や民族のア

イデンティティを象徴すると捉えられるモノが、実はグローバルなネットワークに組み込まれて受け継がれてきたことが窺える。岩谷彩子「変容する舞踏衣装 ― 擬態するカールベリーヤー」は、インドのカールベリーヤーという遊牧民の舞踏衣装をとおして、人々が社会からの要請にいかに応答しているのかを捉えようとする。杉本星子「インドの古典から世界の古典へ ― バラタ・ナーティヤムの衣装」では、南インドの伝統舞踊が、神々への奉納のための舞踏から世界へと広まってゆく過程で更新された舞踏衣装が紹介される。豊山亜希「意匠転用 ― 布から陶器へ」は、インド産プリント布「キャリコ」の名を冠したバーレイ社の陶器シリーズの分析から、イギリスにおいて布地の衣装や制作技術が陶器へと応用された事例を検討する。上羽陽子「産業革命のひきがね ― 色落ちしない多色染めへの憧憬」では、インド更紗へのヨーロッパの人々の強い憧れこそが、産業革命を誘引する原動力となったことが、染色技法とともに解説される。杉本星子「東西交易による技術移転 ― パールシー商人と刺繍サリー」は、パールシャから西インドへと移住したパールシーの人々が受け継いできたサリーの意匠に注目し、そこに反映された民族の歴史を考察する。五十嵐理奈「フェアトレードの先駆け ― ノクシ・カンタ」では、バングラデシュの刺し子刺繍布カンタがフェアトレード商品として新たな役割を付与され、衰退しつつあった伝統工芸の再評価に寄与したことが紹介される。

以上のように本書は、布地の多様な機能を非常に親切に紹介するだけでなく、布地を切り口に異なる民族、宗教、カーストが織りなす複雑なインド社会を理解するための手がかりともなる。モノから様々な情報を読み解いてゆこうとする物質文化研究の視点を読者に提供しながら、専門的な内容が解きほぐされた良書である。